

## 時を紡ぐ

先達の作品を模写する。これは古くから行われてきた美術を学ぶ方法の一つである。何に描かれているのか。どんな材料で造られているのか。どのように描いているのか。道具はどんなものを使っているのか。作品の支持体になるものの材質や使っている材料、道具や技法……、現代においては科学技術も発達しているため、科学的な分析をすれば様々なことが判り、そのものが作られた材質や時代、方法なども見いだすことが可能ではある。しかしながら、作品を創る上で重要と思われるのは、作家が手を動かす速度ではないだろうか。どれぐらいの早さで絵筆を走らせ、刃を動かしたのか。見た目で、筆圧、濃淡、凹凸の差、ストロークの長さ、角度など真似はできるかもしれないが、実際の早さまでは、あくまでも想像にすぎない。それでもAI技術の発展があれば、いずれは分析でき、その早さや動きも実現が可能かもしれないが、きっと人間はそれぞれの個体が違うから、どこまで行っても真似でしかないであろう……と、こんなことをつらつらと考えていると、作品にとって最も重要なのは、その作家にしか、その作品にしか有り得ない“時”なのではないかと思えてくるのである。時代、時間、季節、期間、時勢……いろいろな意味での“時”である。

また観る側においても、“時”は重要である。「……あの作品は一度観たから、観なくてもいいや……」よく耳にする言葉である。しかしながら本当のところ、時間、場所、季節、一人で行ったか、誰かと行ったか、どんな空間や環境だったか、体調はどうだったか、喜怒哀楽の状態はどうであったか、その時の事象は何か起きていなかったかなどなど、その時々で、きっと見え方は違うはずである。久しく、美術は空間芸術、音楽は時間芸術という考え方を根本にしてきたように思えるが、時間芸術としての美術、空間芸術としての音楽という有り方を考えてみるのも面白いかもしれない。いずれにしても、“時”である。特にその速度は、その時、その人のものであり、疑似体験はできるかもしれないが、同じではない……のである。時間をお金で買う時代が来たという考え方もできるが、やはり、お金では解決できない“時”がある。そこを改めて意識しながら美術に関わりたいと思う。

いつもながら、同じ展示室に展開する作家の間には、“何か”が、存在していなくてはならない。それが明らかに2人の共通項であれば観る側も心地よいかもしれないが、実際に創作された作品は、それぞれ全く違うことがほとんどである。今回も衣の作品は、比較的具體物が見え、高橋の作品は、抽象的な表現として捉えられる。もちろん用いる画材も技法も違うし、同じテーマや場所でもないし、一緒に制作しているわけではないから違って当然である。それでも根底にあるものが共通しているのではないかと考えると、作品と対話し、自分の記憶を引き出し、少しずつ作品に近づいて行けるような気がするのも確かである。

そして今回は、その場の空気を写し、時代や歴史を切り取って新たな情景の見える作品

を創り出す2人の作家を取り上げてみた。“心象風景（心の中に浮かんでくる像や姿）”という言葉があるが、端的に言えば、この言葉が作品の印象として近いものがあるだろう。もっと噛み砕くなら……、自分の身のまわりにあるもの、いつも見ている風景、記憶の中の風景、生きて来たことで積み重ねられた記憶……そして、目を瞑ったときに脳裏に浮かぶものと言ったところであろうか。さながら、どこか違う場所に立ち、時の流れの中に迷い込まされた感覚にもなる。

衣真一郎は、1987年に群馬県の温泉地、伊香保町に生まれた。榛名山への中腹に位置し石段街でも有名な伊香保は、坂道が多い。群馬に住み伊香保を知っている人間であれば、衣の描く作品は非常に親しみ深く、写実的ではないのに記憶の中にある伊香保から見下ろした風景がそこにある。さらに、古墳群も同じである。群馬県は古代遺跡が多く、古墳もかなり残っている土地である。学生時代に描いていた作品が古墳のような形に見えたことが、きっかけの一つにもなっているようであるが、自身の興味があるものと、表現したいものの擦り合わせが巧みに繰り返され、衣の描いた世界として提示される。形と色で大胆に構成され、一見すると木訥な筆遣いではあるが、近づいてみると繊細に絵の具を置く姿を想像することができる。あまり混色されないチューブから出されたままの色は、キャンバスの上で視覚的な色の配置により新鮮さを保ちつつ、その完成へと導かれている。またもともと彫刻に興味があったというだけあって、立体作品と平面作品との調和も面白い。木や紙粘土、何かの空き箱や、使い終わった（あるいは、使いかけの）絵の具のチューブなどが、キャンバスに絵の具をおいてゆくこととさほど変わらない感覚で、カービングやモデリング、色付け、描く、置く……といった行為をたどり作品となる。衣の作品は、さらに作品が置かれる空間を意識することで、身体性との繋がりを伺うことができ、制作の延長上に作品の展示があり、その空間を演出するところで結実すると考えられる。作品が展示される空気感も鑑みることは、今後も重要な視点になるであろう。

高橋敬子は、1954年に群馬県最北の市である沼田市に生まれた。温暖化が進み始めてだいぶ気候も変化したが、20年ぐらい前までは冬には積もる雪の多い地域だった。きっと高橋が育った頃、冬場には“雪深い”と言ってもよい風景が広がっていたであろう。高橋の描き出す世界は、そんな想像と結びつく“白”を強く意識させられる作品である。制作をするときも、どちらかと言えば、描いているよりも画面と対峙し眺めている時間の方が長いと言うほどに、色をおくことで残された白の重要性がより高まってゆく。時に、淡い色調の作品もあるが、半透明な白っぽいヴェールを纏ったような画面であってもまた、眼前に“白”の存在を主張してくる。その一方、結果的に高橋のイメージカラーとなっている“紫”は、自身が語る「片手に赤、もう一方の手に青の絵の具を取り、両手を合わせると紫になる……」「赤は情熱、青は鎮静……」という言葉によって、その始まりが想像できる。そして言葉も作品と同様に重要であり、高橋は、ほぼ作品の発表と同時に言葉を添える。

きっと作品の発端でもあり、作品が完成したことに加え、作品を公開するための着地点の確認になっている様にも感じられる。これらの表現行為は“点と点を結ぶための線”……と言えるかもしれない。当たり前なのかもしれないが、生きること、考えること、受け取ること、感じること、創ること、観せること……、様々なことの繰り返しや積み重ねが作品の構成要素となっている。点と点を結ぶための線は、丁寧に紡がれる糸であり、今後この糸がさらに太く、あるいは、何か違うものに仕立てられてゆく姿を想像すると、今後の展開が、描くという行為のその先にあるかもしれないと期待してやまない。

このような2人の作家を見たときに気になったのが、“時”や“速度”という点であった。色や形態、その配置の展開を繰り返し考え、絵の具を慎重にキャンバスに乗せ続ける衣。長い時間を掛けて画面を眺め、見つめながら、ある瞬間に絵の具を一気にキャンバスに乗せ走らせる高橋。そんな姿を思い描くと、作品が創りだされてゆくその時間こそが、作品を観る時に意識すべきことなのかと思うのである。その反面、作品とは、提示され、その場に集約されているものでもあり、見た瞬間に観る者を惹きつける強さも持っていないとはならない。2人の作家が共通して言うのは、作品を観て、感じて、楽しんでもらいたいということである。自分たちの作品に出合ったことで、心が動いた、何かが変わった……、無論、作品を制作することは、何らかのかたちで作品を他者の眼に触れさせない限り極々個人的な行為であり、作品の完成までは、自己完結に過ぎないのかもしれない。しかしながら、展示という行為に進めることで、社会との接点ができ、それが我々の情操へとつながるのである。時を紡ぐ……作家は、作品に仕立てることで時を描き、時を刻む。そして我々は、その作品に出合うことで時を感じ、時を紡ぐことになる。

須田真理（渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館 学芸員）